



「農婦と子ども」1927年  
市川市での第1作。農道で見知らぬ人に怯えた  
わが子を抱き寄せる母親をモチーフにしたもの。



「ママご本読んで」1998年  
市川市生涯学習センターの前庭で見ることが  
できる。

# 常に 作品のテーマは「人間愛」 晩年からは母親の愛をテーマに 穏やかに過ぎゆく時間を 創造する

## 大須賀力さん

Tsutomu Osuka  
彫刻家



「どの作品も自分の子ども」とすべての  
作品に愛情が溢れている。

「どんな地震でも、いままで壁から  
物が落ちたことはないよ」

彫刻界の巨匠・大須賀力さんのどっ  
しりとした佇まいのアトリエは、なん  
と築75年（昭和

2年9月竣工）。

緑に囲まれた中  
山法華経寺参道

沿いの閑静な一角にあります。一歩中  
に足を踏み入れると、明るい光が室内  
に溢れ、天井は2階分の高さがあり、  
壁にしつらえられた棚には、大須賀さ  
んの長年の足跡を物語るがごとく、圧  
倒されるほどの数の塑像が所狭しと置  
かれています。純日本家屋の母屋と中  
庭をささむ形で建てられたこのアトリ  
エで、大須賀さんのほとんどの作品が  
生み出されてきたのです。

「大正12年の関東大震災で被災し、

新たな住まいを探していたとき紹介者  
がいてね、市川に移るようになったんだ。  
そこで、家を建てるのなら、ついでに  
アトリエを造って欲しいと父に頼んだ  
んですよ」と大須賀さんは当時を振り  
返ります。

とはいえ、その時代、大工さんもア  
トリエを見たことがないので、どのよ  
うに建てれば良いのかが分からず、大  
須賀さんが美大の彫刻科の先生のアト  
リエに連れて行き、「採光はこう、天  
井の高さはこう、広さは三間四間の12  
坪（39・6平方メートル）」と、そつ  
くりの建物を造るよう指示したとい  
うことです。アトリエが先に建ち上がり、  
そこに大工さんが寝泊まりして母屋が  
出来たのは翌年の5月でした。

しかし、まだ美大生だった大須賀さ  
んの創作活動はもっぱら学校中心だっ  
たので、せっかくのアトリエもしばら  
くは弟さんが卓球台を置いて遊んでい  
ました。

「後で父は、しまった！と思った  
かも知らんが…」と茶目つ気たつぶり  
な笑顔でおっしゃいます。

現在の創作活動は、まさに悠々自適。  
アトリエにこもるのは昼食・午睡の休  
憩をはさんで朝9時半から夕方5時  
半までだそうです。時間の流れに逆ら  
わず、ゆったり無垢の心で黙々と塑像



### 略年譜

明治39年（1906）3月26日  
東京市神田区三崎町に生まれる。  
大正14年（1925）19歳  
建昌大夢に師事する。  
大正15年（1926）20歳  
東京高等工芸学校を経て、  
東京美術学校（現東京芸術大学）  
彫刻科塑造部に入学。  
昭和2年（1927）21歳  
市川市中山に居を移す。  
昭和6年（1931）25歳  
東京美術学校卒業。  
卒業制作として「北の女」を制作。  
昭和7年（1932）26歳  
第13回帝展に「首飾りの女」を出品。  
特選となる。  
昭和25年（1950）44歳  
東京美術学校の昭和6年度卒業生の  
有志14名で「六窓会」を結成。  
昭和48年（1973）67歳  
第5回日展に「或るポーズ」を出品。  
内閣総理大臣賞を受賞。  
昭和51年（1976）70歳  
千葉県文化功労者として顕彰される。  
昭和53年（1978）72歳  
勲四等瑞宝章を受賞。  
昭和56年（1981）75歳  
市川市庁舎前に、  
平和と文化をテーマに「讀市川」を制作。  
平成6年（1994）88歳  
市川市名誉市民として顕彰される。

と向き合います。

「一つ出来上がると、もっといいもの  
を創りたいという気持ちになる。自分  
が満足するものが出来るまでと思っ  
ているのですよ」

96歳という年齢を忘れさせるような  
パワーの源泉は、後から後から湧き上  
がる創作意欲と、完成度を追い求める

飽くなき自己表現への情熱に他なりま  
せん。

いま（2002年9月現在）制作し  
ているのは、穏やかな日差しの中で本  
を読む女性に母の面影を重ねながら、  
小春日和をテーマにした「読書」。静  
かで安らかなアトリエには、悠久の時  
間が流れているようです。